

研究者へとつづく道

～ライフイベントとの両立と研究力向上～

環境人間学部の先生方に研究者を目指されたきっかけ、経歴や学生の皆さんへのメッセージ等をお聞きしました。今後の参考にぜひご覧ください！

兵庫県立大学ダイバーシティ推進室

柳楽 有里 先生 (国際文化系 准教授)

研究内容

アメリカ文学・文化を研究しています。マイノリティ作家の描いた小説における人種・ジェンダーの表象に焦点をあて、彼らの政治的な問題意識を読み取ることに関心があります。また、アメリカ社会全体が人種・ジェンダーとどのように向き合ってきたのか、というテーマも研究しています。

研究者を目指したきっかけ

大学院に進学してから研究者の道を意識するようになりました。研究をすればするほど自らの無知を痛感し、明日はさらに多くの文献を読まなくては、と毎日を過ごしているうちに気がつけば研究者を目指すようになっていました。

これまでの道のり

大学在学中に恩師と出会い、アメリカ文学の面白さに魅了され、大学院に進学することを決意しました。前期博士課程では、研究に従事する傍ら、高校で英語非常勤講師として英語を教えていました。大学院在学中にアイルランドに留学し「アメリカ文学と映画」を学び修士号を取得しました。帰国後は、恩師の勧めもあり、後期博士課程へ進学することを決意しました。後期博士課程において、最初は論文がなかなか査読を通過せず苦しい日々を送りました。しかしその後チャンスが訪れます。後期課程在学中(3年目)に研究員としてアメリカで研究する機会を得ました。帰国後、博士論文を提出したのと同時に大学教員としての仕事が決まりました。

研究職(大学教員)の生活のなかで...

新しい発見の連続です。研究を通して文献を精読すると新たな発見が得られます。また、学生からの質問やコメントからも大いに刺激をうけます。読むことが仕事になってしまっており、これは喜びでもあり苦労でもあります。授業やゼミ以外は、常に読みものを片手に生活を送っているため、研究以外の時間はなかなか取れません。いくら読んででもそれ以上に読む必要のある文献があるからです。しかし新たな発見によって、それまでの苦労を忘れてしまいます。そんなとき、やはり研究こそ自分の生きがいなのだと感じます。

学生のみなさんへメッセージ

自分を高めることができるというのは最高の喜びだと考えます。皆さんはいま、自分自身を成長させるまたとない機会を得ています。大学という学びの場で教員と共に成長しましょう。

金子 一郎 先生 (食環境栄養課程 准教授)

研究内容

栄養素の必要量は、各ライフステージや生活環境によって異なります。生物の基本原則であるセントラルドグマを理解し、培養細胞や実験動物を用いて栄養素の消化・吸収・代謝・排泄を分子レベルで明らかにする基礎研究を実践しています。

研究者を目指したきっかけ

大学4年生の時、卒論研究で初めて研究というものに触れました。その研究室のスタッフは先生でありながら、全員同じ大学出身の先輩でもあり、毎日楽しく仕事をしている姿をみて憧れました。初めはDNAという目に見えない得体のしれないものを扱って実験しているということだけで夢中になってしまい、博士前期課程への大学院進学をすることにしました。周りの先生から海外留学の話をよく聞く機会があり、自分も海外に住んでみたいと思い、博士後期課程に入学し、研究職を目指しました。研究者として生きていけるかなんて今でもまだ自信はありません。毎日楽しく一生懸命生きています。研究の世界では、45歳までは若手研究者として様々な挑戦権があると思います。

これまでの道のり

博士後期課程の最終年度、海外でポスドクの職を得るため、公募に応募したり、世界中の大学教授に直接メールを送りましたがことごとく断られました。ちょうど学会で海外に行く予定があったので、ビタミンD研究の権威であるDr. Haussler (アリゾナ大学)の研究室を訪問することになりました。2日間のインタビューをこなしたあと幸運にもポスドクとして採用されました。しかし渡米半年後、R01グラントの継続ができず、解雇を言い渡され、新しいポスドクの職探しをしました。偶然アリゾナ州立大学での仕事が決まり、なんとか研究を続けることができました。そこから3年後に帰国し、徳島大学の助教を経て、2022年から兵庫県立大学に参りました。

研究職(大学教員)の生活のなかで...

自分で考えた仮説が実験で証明されたときに大きな喜びを感じます。また、大学教員はTop Downではなく自分の知的好奇心に従って能動的に働くことができること、自分の仕事が社会貢献につながることや、常識にとらわれない自由な生き方が気に入っています。

しかし、研究費獲得には苦勞しています。実験することを大事にしていますが、年を重ねるごとに体力の低下や管理業務等が増え、研究に費やす時間が少なくなっていることに少し葛藤しています。

これからは、学生教育も含めて次世代の栄養学研究を担う人材育成に力を注ぎたいと思っています。

学生のみなさんへメッセージ

20代のころは、将来が不安で、安定した職に就きたいと思うのは当然のことだと思います。しかし、10年20年先の不安をあれこれ考えて、今悩むことはナンセンスです。

卒業研究や大学院は成績よりも手を動かして実験することが大事です。学校にきて目の前の課題なり、実験を一生懸命やること。今日を全力で生きること。他人にどうみられるか気にする必要はなく、自分が毎日楽しいと思えることを見つけてください。

ダイバーシティ推進室分室

推進員：西村洋平 (准教授)

支援員：藤田寛子 (総務課)

